

牛鍋

森鷗外

青空文庫

鍋はぐつぐつ煮える。

牛肉の紅は男のすばしこい箸で反される。白くなった方が上になる。

斜に薄く切られた、ざくと云う名の葱は、白い処が段々に黄いろくなくなって、褐色の汁の中へ沈む。

箸のすばしこい男は、三十前後であろう。晴着らしい印半纏を着ている。傍に折靴が置いてある。

酒を飲んで肉を反す。肉を反しては酒を飲む。

酒を注いで遣る女がある。

男と同年位であろう。黒繻子の半衿の掛かった、縞の綿入に、余所行の前掛をして
いる。

女の目は断えず男の顔に注がれている。永遠に渴しているような目である。

目の渴は口の渴を忘れさせる。女は酒を飲まないものである。

箸のすばしこい男は、二三度反した肉の一切れを口に入れた。

丈夫な白い歯で旨そうに嚙んだ。

永遠に渴している目は動く、に注がれている。

しかしこの　に注がれているのは、この二つの目ばかりではない。目が今二つある。

今二つの目の主は七つか八つ位の娘である。無理に上げたようなお煙草盆たばこぼんに、小さ

い花簪はなかんざしを挿している。

白い手拭てぬぐいを畳んで膝ひざの上に置いて、割箸を割って、手に持って待っているのである。

男が肉を三切四切食った頃に、娘が箸を持った手を伸べて、一切れの肉を挟もうとした。男に遠慮がないのではない。そんならと云つて男を憚はばかるとも見えない。

「待ちねえ。そりやあまだ煮えていねえ。」

娘はおとなしく箸を持った手を引つ込めて、待つている。

永遠に渴している目には、娘の箸の空しく進んで空しく退いたのを見る程の余裕がない。暫くすると、男の箸は一切れの肉を自分の口に運んだ。それはさつき娘の箸の挟もうとした肉であった。

娘の目はまた男の顔に注がれた。その目の中には怨も怒もない。ただ驚がある。

永遠に渴している目には、四本の箸の悲しい競争を見る程の余裕がなかった。

女は最初自分の箸を割って、盃洗はいせんの中の猪口ちよくを挟んで男に遣った。箸はそのまま膳の

縁に寄せ掛けてある。永遠に渴している目には、またこの箸を顧みる程の余裕がない。

娘は驚きの目をいつまで男の顔に注いでいても、食べろとは云つて貰もらわれない。もう好い頃だと思つて箸を出すと、その度毎に「そりやあ煮えていねえ」を繰り返される。

驚の目には怨も怒もない。しかし卵から出たばかりの雛ひなに穀物つぶを啄つませ、胎つばを離れたばかりの赤ん坊を何にでも吸い附かせる生活の本能は、驚の目の主ぬしにも動く。娘は箸を鍋から引かなくなつた。

男のすばしこい箸が肉の一切れを口に運ぶ隙すきに、娘の箸は突然手近い肉の一切れを挟んで口に入れた。もうどの肉も好く煮えているのである。

少し煮え過ぎている位である。

男は鋭く切れた二皮目で、死んだ友達の一人娘の顔をちよいと見た。叱しかりはしないのである。

ただこれからは男のすばしこい箸が一層すばしこくなる。代りの生なまを鍋に運ぶ。運んでは反す。反しては食う。

しかし娘も黙つて箸を動かす。驚の目は、ある目的に向つて動く活動の目になって、それが暫らくも鍋を離れない。

大きな肉の切れは得られないでも、小さい切れは得られる。好く煮えたのは得られないでも、生煮えなのは得られる。肉は得られないでも、葱は得られる。

浅草公園に何とかいう、動物をいろいろ見せる処がある。名高い狒々ひひのいた近辺に、母と子との猿を一しよに入れてある檻おりがあつて、その前には例の輪切わぎりにした薩摩芋さつまいもが置いてある。見物がその芋を竿さおの尖さきに突き刺して檻の格子の前に出すと、猿の母と子との間に悲しい争奪が始まる。芋が来れば、母の乳房を銜くんでいた子猿が、乳房を放して、珍らしい芋の方を取ろうとする。母猿もその芋を取ろうとする。子猿が母の腋わきを潜くぐり、股またを潜り、背に乗り、頭に乗って取ろうとしても、芋は大抵母猿の手に落ちる。それでも四つに一つ、五つに一つは子猿の口にも入る。

母猿は争いはする。しかし芋がたまさか子猿の口に這入はいつても子猿を窘いじめはしない。本能は存外醜悪でない。

箸のすばしこい本能の人は娘の親ではない。親でないのに、たまさか箸の運動に娘が成功しても叱りはしない。

人は猿よりも進化している。

四本の箸は、すばしこくなっている男の手と、すばしこくなろうとしている娘の手とに

使役せられているのに、今二本の箸はどうとう動かずにしまった。

永遠に渴している目は、依然として男の顔に注がれている。世に苦味走ったという質の
男の顔に注がれている。

一の本能は他の本能を犠牲にする。

こんな事は獣にもあろう。しかし獣よりは人に多いようである。

人は猿より進化している。

(明治四十三年一月)

青空文庫情報

底本：「普請中 青年 森鷗外全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年7月24日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版森鷗外全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～9月刊

初出：「心の花」

1910（明治43）年1月

入力：鈴木修一

校正：松永正敏

2003年8月20日作成

2016年2月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

牛鍋

森鷗外

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>